

国語教育実践の反省と私見

石 部 裕 士

一 はじめに

現代の高校教育において、「進路指導と生活指導の問題」換言すれば「進学就職のための教科指導か人間教育か」ということが大きな問題になっている。教育には、学力をつける側面と人間をつくる側面とがあつて、二つがたがいに関連しあつてはじめて教育の効果をあげると考えられている。しかし現代の教育は、あまりにも教科指導に偏向しているように思われる。円満な人格を形成する人間教育こそ教育の真の目標であることはわかっているが、直面する進学や就職の問題を解決し好成績をあげるために学力重視に向わざるをえない。ここに教師としての矛盾があり、悩みがある。そして教師以上に深刻に考え悩んでいるのは生徒ではなからうか。

「高校生活をふり返つて感ずることは、私が予期していたものとは全く異なる味気ないものであつたということである。嫌いな学科

が増し、単位をとるためにはその嫌いな学科を無理してやらなければならぬ。試験だ試験だと追い立てられて、それにきゅうきゅうとして日を送る。楽しみなどどこにあるうか。勉強による楽しみ……それは自由な勉強から生れるものと私は信じている。一週にたった一回の楽しかるべきホーム・ルームも、生徒間の親睦・先生との親睦……そんなものはあまり見られず、芸をおしつけられて困らされるいやな時間になつてしまった。」(32年度三年)

右の文は生徒の感想の一部であるが、考え方そのものに問題はあつても、現代の教育の欠陥と思われる人間教育への不満を強く訴えている。私は、この「人間教育」と「教科指導」とを、教育の二面性として考えるのでなく、教師は各々の教科を通じて人間教育を行なうという一元化された本来の教育の形に帰る、そうした姿に近づくのが、現代の教師に課せられた使命ではないかと考えている。そういう意味から、私は五か年の教育経験の反省を通じてこの問題を考へてみたいと思ふ。

二 学習意欲（興味）喚起の問題

生徒の人間形成に役立つ学習、ひいては学習効果をあげえる学習指導としてまず問題になるのは、教科に対して興味を持たせることであろう。これは比較的少数の参加、一部生徒への魅力的授業は簡単であるが、多数の、クラス全体の学習意欲を喚起することは非常に困難である。しかし、困難ではあるが、何か方法があるのではなからうか。

「どの先生の中にも先生ほど早く生徒の名前を覚える先生はおりません。やはり、教師である以上先生のように早く名前を覚えて下さるのが、生徒である私たちにとっても、その教科に興味がわく第一の段階であります。」(33・三乙)「先生は、学年の初めから全員の名前を知っておられたので感心しました。」(32・二甲)「先生のもっともすぐれている点は、生徒の名前を全部覚えられていること、常に平等に指名されることです。これはなかなかできることではなさそうです。小学校の時も、中学校の時も、そして高校に入ってもやはり同じように、先生方は優秀な生徒を引っぱっていかうとされるようです。これによって、今まであまり勉強のできなかった生徒に、ますます劣等感を与えるようになるのではないのでしょうか。ですから先生は、今後も絶対に忘れないよう、劣等感を持っている生徒を明るく見守って下さい。」(34・二漢)」

教師として教室に臨むにあたって、生徒の氏名と顔を記憶することは非常に重要なことである。小・中学校の教師に比べて高校教師は、生徒の名前を覚えることを必須条件としていないようである

が、間違いでなからうか。高校教育が「知識の切り売り」に走りやすいのは、ここに大きな問題があると思う。高校へ新しく入学した生徒が、等しく口にするのは、「高校の先生は中学の先生に比べて、何か親しみ難い。授業が終るとさっさと教室から帰って行かれるので話しくい気がする。」という言葉である。中学に比べて生徒への接近が、教科指導だけに終って、クラス担任を除いては週一回のクラブ活動しか生徒に接する機会がないという機構にも問題があるにしても、生徒の氏名を早く覚え、実態をつかむことは、根本には教師個々の努力に待つものではなからうか。私は氏名を記憶する方法として次の事を実行している。まず記憶しやすい氏名（顔）から覚えていくこと、これは記憶の第一段階である。記憶しやすいというのは、それまでの記憶の中から似たものが見出されるばあい、何か特徴があるばあいなどである。したがって、兄弟が卒業生であるとか、非常に珍しい姓であるとか、知人・友人に似ている場合などが最初に記憶できる。次に毎時間出席を調べるとき、生徒の氏名と顔を一致させることが大切である。しばらくこれを続けると、大体の姓名の順と座席が記憶できる。このおぼろげの記憶が進んだ後は、指名等によって一層確かな記憶に進むことができる、さらに住所、性格、趣味、家庭状況などを加えてより詳細な人間像を知るのが理想である。

「三年になって古文を教わった。古文は私にとって最初面白くない科目の一つであった。しかし、教わっていくうちに、わからないままに興味がわいてきた。これでよいのだと思う。先生は今まで通り生徒にその教科に興味がわいてくるような教え方をされるべきです。」(34・三乙)「私は三年になって古文の時間が好きになった。とい

っても古文が好きになつたのではなく、先生の授業がおもしろいから自然に古文の時間が待遠しくなつたのだと思います。」(34・三乙)「私が教職生活にはいつて一年目の授業に対して生徒の批評は、「国語が高校になってきらいになつた。」(30・一甲)「もっとユーマラスに楽しく授業を進めてもらいたい。」(30・一甲)「だからだらして変化なし、たいくつな授業。」(30・甲)のように授業に興味が持てず、たいくつな時間であるという意見が多かつた。その中に「授業に関係のないことでもいいから話をしておもしろく授業を進めてもらいたかつた。」(30・二乙)という意見があり、興味ある授業へのヒントを得、まず何よりも興味ある授業をと心がけた。

「授業の合間の楽しいおしゃべりや、その他いろいろのおもしろい話など生徒をアキアキさせず引っぱつていかれる先生は、まるで私達の友達のようにでした。先生がいつまでも生徒達のような気分であられることが、私達にとって一番のミリョクです。」(33・三乙)生徒に興味を持たず方法はいろいろあるろが、私は一時間一時間にたいくつを覚えないうようにと考へた。(これは学習指導法にも関連するので後で述べる)そのため現代の高校生がどんなものに関心を抱いているかを知る必要があつた。

「先生の授業は面白味があり、また文法においてもあまりくわしすぎもせず、私達にとって適當であつたように思います。いままでの授業において思つたことは、先生の注意なり教訓が、毎日の生活と関連あることが度々あり、一層役立つたと思ひます。」(33・三乙)「教科書の説明から他へ脱線した時の話が面白かつた。つまり教科書に書いてあることに限らず、広い範圍において教えられたことが、一番授業に興味深くさせたと思う。」(33・二甲)「先生の

授業はコチコチした感じがなく余裕があり、勉強しているというのではなく、ためになる話をきいているようで、人間としてより有意義な時間だと思つています。」(33・二甲)「中学の時とは異なる性質の見られる授業でした。中学では単に書いてあるものを読み解釈するだけでしたが、高校においては、先生の話や感想はもろろん、経験談をも交えて楽しかつたと思ひます。」(34・三乙)「先生の物の考え方、人柄が私達とかけはなれていないということが、私にとって大きなプラスだつたと思う。」(34・三乙)「初めて授業に来られた日、話の上手い先生だと思つた。映画演劇に興味をお持ちとみえて、授業中にも例えには映画のことがとび出す。しかし、これは授業中の緊張がなごんでよい。たいくつしないで授業ができる。

例をあげて説明されるので理解しやすく教へ方は悪くない。」(34・三乙)生徒に興味ある授業とはいへ、それがあまりに授業から離れすぎ、正規の授業を逸脱するものであつてはならないし、学習効果を低下させるものであつてはならない。そういつた意味から、まず引例のばあいには、解りやすく具体的なものを選びあげることにした。それには、生徒の興味の対象である映画などは適當な材料だと思ふ。映画には種々の場面、種々な世界が視覚的に描かれていてからである。その他、教科書に採られた教材の思想、人物に関連して、他の有名な人物や思想を話したり、生徒の関心を持つ現代に當つて考へたりすることも効果があるのではなからうか。また、生徒がたいくつしたと思はれるとき、緊張時の長すぎたときなどに、少時脱線するのも効果があり、新たな意欲を甦えらせるものと思ふ。しかし、私もこれ以外の学習意欲喚起の方法を考へないでもなかつた。すなわち緊張の連続により、その学習に注意を集中させる方

法——いわゆるシンボル指導——である。就任当時はこの問題でいろいろ悩まされた。「何となくゆるんだ感じの授業である。も少しシメテほしい。」(30・二乙)といった意見が多く見られた。これについては反省し「ゆるんだ感じの授業」という欠点を取り除こうと努力した。しかし、中には「全体として感じたことは、いままでになかった新鮮な授業だつたと思う。他の時間は緊張が非常に強く、むりやりに姿勢を正している置き物のような存在だった。先生と生徒とかけはなれたものでなく、うまくとけあい楽しい授業ができたと思う。」(30・二乙)といった批評もあり、国語という教科の性質上、私自身の最初の考えどおりに、上記の興味喚起の方法を最良のものと考えたわけである。

以上、生徒の教科への興味喚起について述べたわけであるが、その教科(または教師)に興味を持ったとしても、必ずしも自主的学習意欲とはならず、受動的興味に終わったならば、学習効果は半減する。そこで、次の段階として「学習指導」の問題を考えなければならぬ。

三 学習指導法の問題

指導法は一般に「講義式」と「自主学習」(グループ学習も含む)に大別できる。理科系教科においては、実験・演習という自主学習が一般化され、また文科系教科においても最近自主学習が重要視されている。そして、この方法により実績をあげている学校も多いのである。しかし、この理想にいたるまでに種々の問題が横たわり、現実には講義式授業も多いように思われる。(教師が安易な方法を選ぶ場合が多いが)私も初め講義式か

ら出発し、その中で生徒を活躍させる方法を考えた。その場合問題となったのは「指名法(対話法)」である。

「生徒からどんどん発表するような形にしたい。」(30・一乙)「番号順に指名しないで生徒にどしどし当てて生徒も一緒に考えるようにしてほしい。」(30・一乙)「もっと質問を多くして生徒を困らすように。」(30・一甲)「国語の時間はあまりなめらかすぎで、何か活気がないように思えた。そのために、少しは私だって先生の質問に対して答えられる時はあったが、別に手をあげて答える必要なんかない、そのうち誰かが答えるだろうという消極的な思いになることが多かったように思われる。しかし、活気がないからといって、別に授業がたいくつでたまらないとも思われなかった。」

(31・三甲)「時間中に生徒が質問されてもだまっまっていることが多かったので、それを発言できるようにして下さい。」(32・二甲)これらの意見から、質問指名などは出席番号順や席順に当てるのではなく、生徒の能力に応じた質問をすること、そして質問を多くすることが生徒自身に物を考えさせる方法であることを知った。そのために、上に述べた生徒名をまず覚えること、それと指名を平等に平均して行なうことに心がけた。また、高校へはいると挙手をしなくなり、質問が理解されている場合でも自主的に答えないことが多く、これを改めさずにはどうしたらよいかを考えた。

「古文の時間は、おもしろくまたまじめに勉強した。原因は何であるかを考えると、長い文章を口語に訳すのではなく、短いことば、文章を訳すためと、もう一つは全員で考え、発表するからだろ。もし番号順にあたると、自分のする部分はいわしくしらべ、他の人の部分はあまりしないようになり易いです。」(33・三乙)「先

生の記憶力のよいのに感心した、前の授業のことを覚えていて、名前を当てるにもむらがない。」(33・三乙)「割合によかったと思つた点は、その時間に全体の人にまんべんにあててゆくことであつた。そうであるから、次の時間の予習はせひやっておかないとあつた時間では眠くなつたことはありません。何故なら、よく聞いていないと何時あたるかわからないし、文法的問題あるいはその他の問題で、頭を働かせなければならぬから。」(33・三乙)「先生の中には、一時間中一人でしゃべつて終えられる先生もあるかと思つと、先生のように生徒に平等に質問を与えられる先生もあります。やはり生徒に解答を求められる授業の方が、受けがよいのあるような気がします。」(33・三乙)「みんなの意見に深くたち入り、くわしく教えて下さり、尊重して下さるところが大変よいと思ひました。」(33・一甲)「答がまちがつていても叱らないから自由に発表できてよい。」(33・一甲)「質問がはずかしがらずにしやすかつた。」(33・一甲)「頭から教えられるというのでなく、みんなと一緒に心算してできる授業です。」(33・一甲)「指名されて答えられなかった場合、必ず次の時間にあてられる。あまり覚えがよすぎるから忘れるようにしてほしい。」(34・三乙)「一人一人に指名され答えさす方法は、緊張を覚える他の教科とは違ふふんいきで学習できたと思う。今後この方法を試してみたい。先生の授業の仕方には満足しました。というのは、先生生徒の区別なしに大変遠慮のない、それでいて授業の中にとけこめるような話し方をなさつたからでしょう。」(34・三乙)「質問式に授業を進めていくのは頭に入りやすいと思ひます。その場合、多勢の生徒に公平に質問されるのも気が持がよかつた。」(34・三

漢)

生徒に自由に発表させ質問させるにはどうしたらよいかを考える
と、まず、発表しやすい雰囲気を作ること——いわゆる教壇づくり
——である。そのためには、教師と生徒が接近し、教師の人間性(人間の親しみ)を生徒の前に示すことが必要であらう。私は年度初の
一時間はいつもそういった時間に当てている。「最初の時間に、
先生が自己紹介をされましたが、あのようなことは非常によいこと
だと思ひます。先生という名にかくれてしまわないで、自分を生徒の
前に広げてゆくような感じがしました。」(33・二甲)「二年生の
時、私についてという題で話して下さつたことが非常に印象に
残つています。そのような先生の経験なり、生い立ちについてもつ
ともつと聞きたかつたと思ひます。そういったことを話す機会を多
く持たれる先生ほど、より親密感を増すのではないかと思ひます。」
(34・三乙)「そういう雰囲気を作つた後の問題としては、生徒の意
見なり答なりが誤つていた場合の処理だろうと思ふ。たとえそれが
違つていた場合でも、これを全くはねつけるのはよくない。「こん
なことがわからないのか。」という言はつつしむべきである。

「私が一番感謝していることは、先生が一度も軽蔑めいた言葉を出されなかつたことです。」(33・三乙)「質問されて、その答が間違つていても、違ふ、といわれなくて、自然に話の中に入れて、その解答者に自分の答は違つていたのだ、と思わせて下さつたのは私たちとして大変よかつた。」(33・一甲)「間違つたことを答えても、頭から違ふとおっしゃらないので、自分の思つたことが言えてよかつた。」(34・三乙)「先生はまちがつたことを言つても、ちつともぶじよくしないし、それを正しいようになおして下さい、

自分でもすなおに成長できたことを感謝しています。」(34・三漢)「意見を発表したり、答を述べたりした場合、その答が問よりかけ離れている場合でも一度はうなずいて下さり、それから他の答を待たれたり、正しい答を言ったりして下さるので発表しやすかった。」(34・三甲)しかし、答の性質によっては、おだやかに違つた理由を説明してやるのがよければあいもある。そういう発表しやすいつ零開気を設けたばあいには、三年生になつても挙手し意見を自由に発表することがわかった。

以上のように、自由に生徒の意見発表が行なわれるようになってはじめて、自主学習という理想に近づくのではなからうか。私も徐々にではあるが、その方向に向かいたいと思つてゐる。

「漢文の時間に、本を離れていろいろ、人生のあり方とか、そこに書かれている人物の生活態度など話しあつたのは大変よかつたと思ひます。他にこういうことを話しあう時間もなく、他人の意見を聞いていろいろと考える機会もなかつたので、そうした意味においても大変有意義な授業であつたと思ひます。」(34・三漢)「漢文で、陶潜や屈原の辞とか李白の詩など習つた時、彼等の生き方考え方に対する皆の意見をもう少し聞きたいと思ひました。いまの我々にとつて最も重要な、何かがあるような気がしたから。」(34・三漢)「グループを作つて何か研究したり、あるいは討論形式をもつと取り入れる方がよいのではないかと思ひます。つめこみの勉強の結果は、一時的にはよいかも知れませんが、すぐ忘れてしまふと思ひのです。今の高校教育は、大学受験のために予備校化してゐるのでしかたがないかも知れませんが。」(34・三漢)「このように、生徒自身も自主学習の効果を認め、現在の学習状態に不満を持

ち、そういった自主学習・グループ活動こそ人間教育に役立つ学習と考へてゐる。国語甲は当然のこと、古文・漢文においても、そういう自主学習の方向に進みたいと思ふ。

四 おわりに

以上「学習意欲喚起」と「学習指導法」の二つの問題について、生徒の批評感想を資料に、私の考へ実行してきたことを述べてみた。「教科指導を通じての人間教育」という当初の目標に、近づきえたかどうかはあまり自信がない。しかし、このことだけは言へると思ふ。生徒も一個の人間であり、その人格を認め教師が人間らしく臨んだなら、彼等も素直に人間的成長を遂げるものであると。経験年数も浅く未熟な身であるが、この目標に向かつて一歩一歩近づくことを、今後も心がけたいと思つてゐる。

△付記▽

この拙稿は、勤務校の発行誌「笠岡高等学校紀要」第二号(三十五年十二月刊)に発表したのを一部訂正したものである。したがつて生徒の批評感想は、三十年から三十四年度までのもので無記名調査である(三甲とあるのは三年国語甲のこと)。なお三十五年以後のものとして最も新しい昨年度(三十六年)三年の批評感想を、参考までに次に載せてみる。

「総括していうと、国語の授業はかなり充実してゐたと思ふ。先生が熱心なので次第にそれにひかされてきた。授業中に質問されることなど相当考へておられるようだった。先生の授業態度は自信満々といった風でした。本当に巾のある奥深い知識を持つておられるの

に感心しました、記憶力のよさも。教える生徒に対してもムラなくマンペンに当たり良かった。私達は先生の教え方に欠陥があるとすぐうわさして、あれはいけないとかすぐ話しますが、この時間のうわさをしたことも聞いたこともない。後悔する所のない授業だ。」

「国語の授業は中学時代と比較するとはるかに面白かった。特に先生の時間は楽しみでした。何故かという、ただ単に字句の解釈ばかりでなしに、内面的なものの思想的なものに触れることができたからです。そしてまた、私の感覚という感じ方が、先生のと全く一致しているのかなと思う位（己惚れをお許し下さい）先生の、たとえは和歌の解釈とか小説の心理的なものへの解釈の仕方が、私にピッタリ合ってよくわかったからです。それから時には、文学論とか思想論みたいな討論の時間を作って下さったこともとてもよかったです。思っています。」

「二年三年と国語甲を教えていただきましたが、一年の時に比べて何かしらほんとうに国語の勉強をしているという感じが強くなってよかったです。先生の教え方もとても落ついていて、国語という教科をするにはやはり雰囲気があって感じがよかったです。」「好きであった国語の時間を、また好きな先生に教えていただいたことを幸運、幸せであった。また、その時間に学んだ多方面の人生の見方などは、先生の問題だけの解き方だけでなく、物を深く見詰め考えるように指導して下さいました。」「信頼できる先生々この言葉がびびりだと思えます。あらゆる方面で、たとえば授業においても、一つの問題に対してごまかす（というのは大変悪い言い方ですが、他の時間の内で何となくそういう感じを受けることがあるものですから）ということもなく、知っている

限りのことをていねいに説明され、またホームルーム等の当番の人に対する態度でも他の先生にはみられないほど、忙しい時でも熱心にいっしょになって考えて下さるなど、先生のりっぱな人柄があらゆる面に表われていました。」「小学校中学校高校を通じた国語の授業の中で、最も気楽に楽しく過ぎた時間だと思ふ。それは授業の内容も変ってきたせいもあるが、ただ先生一人にしゃべらせておく授業の形ではなく、先生と生徒と適当に話し合いをしながらの授業であったためだと思う。この点では先生に敬意を表する。それに、他の先生だったら採り上げてくれそうにもないような、独言的な発言をも認めて下さったことは、私達生徒の自主性を助長することに成果があったのではないかと思ふ。」「私は小さい時から国語に興味もてなかった。それは深く考える術に欠けていたためであらう。直感的にしか判断できず、深く没頭すると迷うばかりであった。このことは今でも、いや将来もおそらく変らないことであらう。しかし、高校での国語の授業のわずかの間だけ、先生の御説、友の発言等でもっと深く考えよ々と私に自覚させた。卒業後、社会人としての自覚を維持拡大させよう。」「先生の授業内容が、非常に公平なものであることは良いことと思ふ。それに、授業方法が多角的であることは注目すべきことである。また生徒に物事を考察する手段、方法を巧みに教えられるのは見事である。」「国語という教科は一般的であり、ある水準までは全員達しているという理由もあらうが、ただ一定の人ばかりに限ることなく、広く全員に発表を求められた先生は、現在にあった民主的な教育方法を採用された、我々生徒の理想の先生でした。とくに生徒の名前を意識して覚えて下さったことなど、ぜひ今後とも続けて下さい。」

（岡山県笠岡高等学校教諭）

三十七年十月改稿